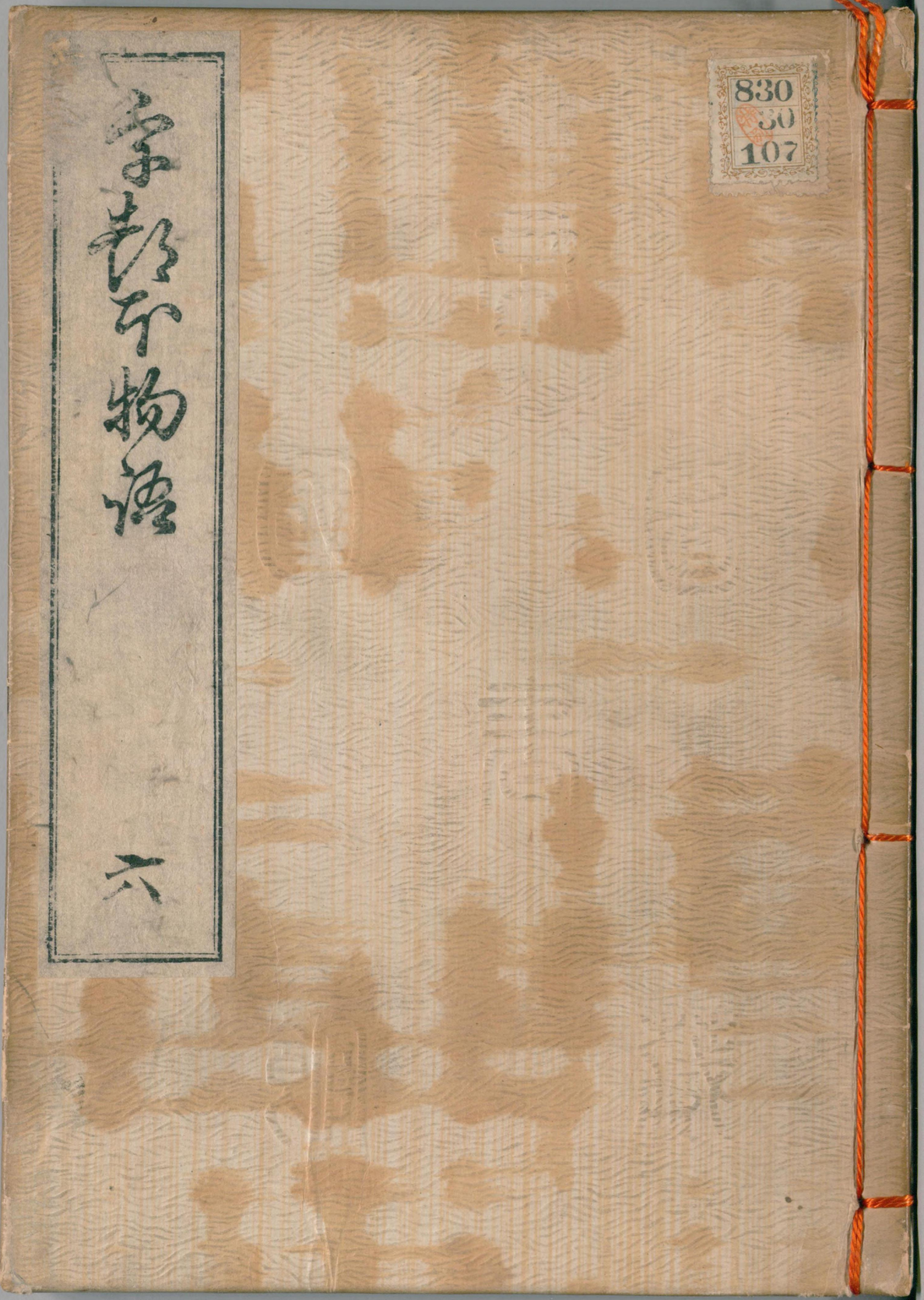


830
30
107

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

830
107

宇津保物語

一名春日詣　梅の花笠

五

古本四の巻

今校本十四の巻

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

梅のむらさき　春日詣

梅花笠ト云ハ三十ウ条ノ小宮ノ前ニ見エ
春日詣ト云ハ初ヨリ十七十ニテ尊ニ見エ
（十七オニ見エ

春日詣ノ名目ヨリアリト云エ

巻六

大正
4. 7. 20
購求

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

ロアヨニ在昵今ナトニハ黄丹トカケリコレヲロウニトヨムレンモ音訓マシヘイフ〈キアラサレハモトヨリニナルヲンヒキ同シャヨリテカリ字ノマウニカクモカケルナルヘシンモトノ色ハ丹ニ青ヲマセヘルニテアルナリ

藤原若冬ナミウ嗟我院者五十二ウいくみもろひろみうけナセヒト鈴鹿下巻十ウ三ト記傳廿五廿オ

ひとつ

子クラモノハヒトリ

ら。あやまちされ（ナシ）ぬ方あるこそよけれ。女御のもろこし（こうそ）にて（ニ）竜（ハ）宮（ニ）月胜（そうぐ）のくすりをもとめ（ヨナシ）給ひしに。

ねたきまで。

ひくらしまかせ（アヘム）給ひ（ヨナシ）ける。

そらにしられぬ（ぬ後朋）雪のいとしろく。

洗（ススム）されたる（ヨナシ）ほどに。

毛下磐

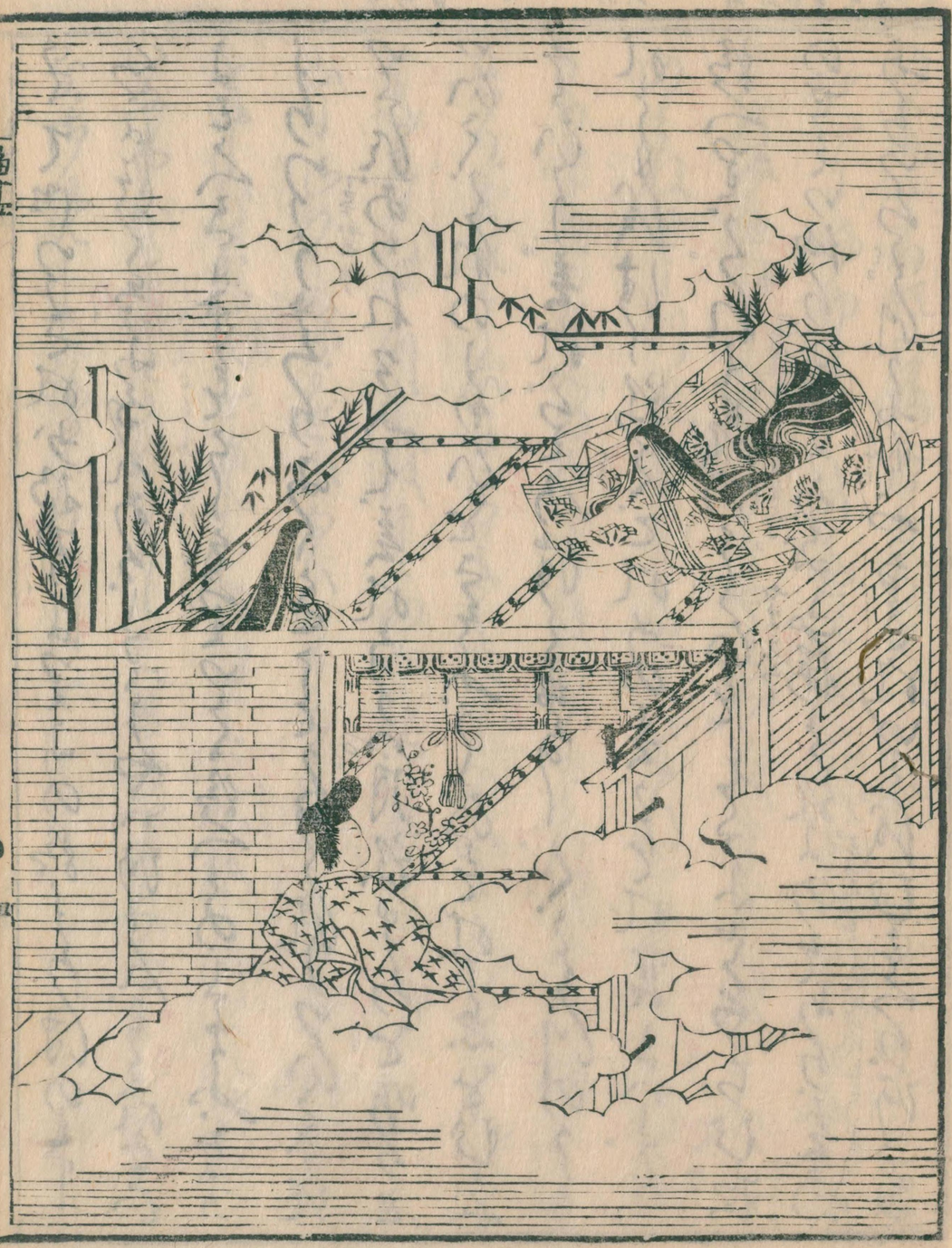
そうんそうもめでたきものの中にこそ。

山ふかき（ナシ）ところ（タニ）にて（ヨナシ）御

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

○キノフコヲ上ノ朔ノ…ニ月廿日ト有サレハ十九日ヲ
モテトシテヨムヘシ

ゐるこそ（うん）物ゆゑもなき
といふこゝろなるへし（とゝ）
まゐり給ひてのち（中宮ハ御里
凡春下 わが宿（やど）よりそこゝろ
ねさめのよそそゝれのくよ
うくひすのこゑ（聲）のどかにきこゆ
凡春上 梅の花（ハナ）ニオキオキテハツカニ
梅の花（ハナ）ふりしく（ヨリ）ゆきと（ユキト）
ことまちくらし（正義）ありやなしや（正義）
あるかなきかの（ヨリ）ほのかなる
いとよやうくん（寛正）古歌（ウタ）これ
の春

ゐのとゝ
秋の初（ハツ）風（カセ）ふきぬ人（ヒト）の
のこゝろ（ヨリ）ほのかなるやうに感（カン）
じ（ヨリ）ほのかに（実正）海（ウミ）を春日（カスカ）
もやうくん（正明）古歌（ウタ）これ
の秋
ねこゝろにのこせつゝ（ヨリ）ゐ（ヰ）
るぞ（ヨリ）ほのかなる（正明）やうくん（ヨリ）秋
の風（カセ）のこゝろ（ヨリ）ほのかなる（正明）
ちこゝろ（ヨリ）色（イロ）そめやすゝ（忠純）
ふきそめし（清正）秋の風（カセ）
ゐるこゝろ（ヨリ）ほのかなる
ふるの秋
ゐるこゝろ（ヨリ）ほのかなる
ふるの秋

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

頁 右よつ人ニ千ニ皆ノ字脱セリ 上朗詠イアリ

○春ノ雨声出テト云題上ノ目録ニナシ

○風オツレト云題上ノ目録ニテ又哥ニモ風ノ一ナシ風ハ花ナト書誤ニヤ

やむことなき人〳〵しも、なほさふらひ給ふ。さてまろうと達に

め給ひて、左近中将源のもろすみ、かはらけとりて

なる歌

吉海云もろすみすけあきら共源姓なれハ同しきとも又下一本松の事しき紀の宰官の上にまつハくろし下の松の事しき中将とあるいつれも左近中将ならハ同しきとしへるにし

助純ニヤ正頼三郎

松かねもいはひそめてそ春の花は

のかみまてこゝろにかはりし中将あてこのみやこそゆきさむ

こゝろみあるこ

花さかぬえたもありてもいはむまけのやすきに

いろもかへす人しらぬ宰相きねしてこの春かへしける

て

花さかぬこゝろにふかくもある春のくれの松ハ

漂はるゝみゆらんさへはやすかなる

さて頼やかにてるのえにこれ春の花よりもさきにあるへき梅の枝

のことはえとそけるこれを人の宮位よりしてめてたれ

人々かはりて左中将、ねよりかほしきむかし

此哥上文師純ノ下ニ入ヘシ

さは頼の松のふるさとしける物はりへしちさるそむ

ろめくらそうつれしか

忘るゝ人のむかしをやかしほの花のこりかすく

もまつらふかたふ松をかね源すゝかはしれの家み

とりまかり

風葉春上 右少将仲頼

鶯のれるせとさも春日山のこりかめ

きさいちかへ月よりも、かのしさかねまつとのかれやさ

なりしかな風のたしかにかくれむもいふふはよ

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

貞明阿曇ヨリ後モノヨラ源氏物語ノ名紫巻ニ源氏ノシタニオセヒ呼ニなぞゆくえハいかゝとうたがくくさゝつゝあひさう初しらなミ末のまつやまこすともきみをバわすれじ

風賀

うらゝかのまゝひく糸もいと長き

春の日のうらゝかなるに

うぐひすの梅にうつるを

春をそれいかゞ思ふらん

春みやこさくら盛りに

のどかなる人

河のこ戸明 紀十郎

兵衛 紀茂樹

頼 純十郎

清 純九郎

秋をまつこの八首次第ニ歌ノ次ニイルベキヨシ明阿イヘリキ

蔵

うらゝかなる人春ゆへ

春

春毎に

ヨのイム

木工

花

さく姫にうつろふ

花の八重よ咲しより

まこの栄

春わかゝれ

尚

花のよそほひ

松

下上廿三ウ八又月 此題上ノ
目録ニテモ
オクレタルヒニ 右目録ニテシ
イカナル題ゾ考ヘシ

春山の鳥のせみはなくとくこ蓑のと
はやまひしかるらん。右近衛尉なりとてなれ時かき
冬はいみあるをり
冬山のりをくひしつちもえひとはるのさく
こや雁しりせうらん。左近衛尉せうすくなをみそみは
かみえぬ月
わりとも此冊人の中ににをしらくいなせれり
なくしか近衛めりぬ月。此ほうしなせうすく平にきちけ
よられたるひよ
わさりけれはるりふみ里は山のこれのこれなれ月
まこれしりうの利るところの里の花くけらあるなれ

忠乞奏ニ卒北方俊蔭
韓馬山ヲクラブ山トイフ
中比ヨリアレトモ誤レク
クラフ山ハ近江ナリ 梅ヨリノ
物語モクラブトイヘル定メテ
クラマト有レニハアラズ下ノ
忠乞ノ哥ニ古ヘニケラク
クラフノ山ハトイヒカケタル
ニテクラブアルソ明ヘクラマト
ナキサシハ中々モワロシ
祢こと
ロあそひ

まなくこのはゝそはものく霧りきたわりなくて
わそとん。なりふあらくなりれ一条このなまうれさ
むなことぜとりふ琵琶れてゑりきこ色でおもかめ
くらいのてまるとくしほそりす。なりそそしおとも
なまかんくとうなさをこしきなくるほあんなり。
いうなうん。ふりさかくなりりしをそゆるとん成にくち
いそうふくゝらふひとろ雅はいかれなるとこそれとこなるひとに。
なるし城山よ此月いなるかこら雅をらりてちらく
りはなきまんよいか然んしときてやうかりけらぬくりしに人
よきのものいとくそてこれらけのにことあすに霧とんの
くらあるそひみさとあつくせとあるふりれはれしへいうして

なりしやそれ大海のごとくなる智者
恵こをみるのみにくらく考究ともいふべきを
てらす事あたはず暗部ともいふべきを
まそらうさ而ようつよこしのうえ
一よ大般若の妙理ともいふべきを

いまはかく海のはてにいふとも、これかれん中へのおほそ
ぞ人かゝんあとの孫もるゝこそもしにくゝとみえはへ
をいつてる、うると紳くてみなくのおそぞ皇
をいうこれしくらもうしてうちさうへふりせ
きよの花の身にも色ぞ世よこあひくらくのをも海
あゆくいちらくきこえよりてみくうりほどめさん
よねうどもあはれはいとよそうのはしかすかひんあかくせこ
の雨よそいつくら色ぞとものなるとくゆくしれいぞ
くいひてゐてう

風雅二 真言院僧都

めづらしく世のはての婦るゝこの孫経みく山人の袖
をとらぬ、おちやをあくぬくてそていとまくあるりめ

うちとておこめをぬきてもうくらひてうれへ
みなかんとこのもゆきの聲松風のひゞきさまり
きこえ人やありとそうらうりきゝかんかへうらふ
ほかくて世を経てゝくかのうこと海のうちそつく
してありそうそて枝うちかくれ中へよてきくあり跡
ら思ふよりよ、かゝんてつくらきくて経もせ下ふきてき
うちくづつうちうめ経りくきれ共費もうかへ
のうらくゝめつうしまくはつかうし共かは京ふ
のみこ竹経のおもん、かゝせごう継うふ経りりて経り
ぬを、かくあるの人のきこえよいりてありし婦まさらる家
らへ、かくんそうちうきすまよて携よあんなどいひて。

て侍しんやいとそ。かの御はらからは侍しかくなくかく侍し
かは給ひしかまつりてくらかん、十四五はかりなるかきらう
こゝろしらひし二十年ふすん侍ぬなそしもなくて
よろつのたりしよ侍らふかく罪つくり一生をすくる事を
り覚て侍しかは前世の罪業ありけくわろかるさんらう
の衣りうを人のかはりとてもかうちとたちて
こゝろいかはすうらくとしき侍へ大将君をうは
しめうてゝかくておいらとはる人すまこおもしこと思
人のかし大将のおほん御をも思ひへまうさ侍りかな
ともかくなからの世とさんせるんとるんおほやけさらし
よの中のりくりてのまれはして、宮しうへぬわくもは屋

乃もきれはりのは屋うまらくしらめうきはかえ侍る。
れとくいそこそとのせをとのすう侍りますつ。文の日より
ゆかりしまするひてそれはかりんやかゝはりそてものく
ひろきくならぬ侍らかれぬやよきこうまたさせそうち侍
てこゝそう御みちよいゆかりけうて侍りとし、ゆやもとそ
よるひよゐめし侍らぬならぬわりはかうかのつとと
やなかうらんとるすし。とところひ人世中の世のうくはし
これはいれやのうんち屋みし侍ませぬとのりきむは
わさせる物やなうろしめしなはかゆうちうか侍しるは
山てかやしまるのそうてく御らのくめしうかうきを大将君
ゆかれんぜるんろといはしきのし侍るんうし。まさとより

てとうちけるむすこのいふまゝにくせ申よな
とあるくちうるいの風ハあめをたちなくるみをたゝきて
まゐるとそいふれこゝろもとなくおぼしめしてあるに
もまうとの秋とうちなきてゐたるかほのまみんとそ
なかめ給ふ聲よのまゝにうちいふもをかしくてほゝ笑
給ふ程に
佛のおんことをもうちわすれたまひてこゝろもとなく
せんとおぼしめしたるをうちなきてゐたるかほのまみ
よにたとへんものもなくおかしくてほゝ笑給ふ程に
うち笛をとりあやしてうたひ給ふ
うき世とてうちあはぬるをうらみしもいまをかぎりの
ものおもへばイヤ

あやしてうたひ給ふオカタノアサノ血ヲサヘアヤシテ

右近少将ハ承頼カヒ思ヘトモイサヽカ心ユカヌ下ナカラハ承頼ヤリ
京志ヨミ人レラスミテモナホヽスモミヽノホレケレハ升乳人ハイトスヘラナリ

はゝ人のをもとへ後
のくとてもとをるくていふをこのとぐみしくへん
とそふみもてくるまのこ
まうとうとてやるもくる
よるんすうるうち給まゐる三日の月の
くまもなきにはゝ人春日
よ松
ひとりゐてうちなかめ風ヨ
めにくくうちよるものかな
一昊月うちへ陰後
いうるもみをたゝかくて
まやるおもひのみつもるくれ
てをのしうちなかれいるいろなし
ゑのみ将をれつゝひ
ろうみをこれも後

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

ふるもしいそぐや

春吉 そのめうと云よりしらくもの

うちもせりいろ〳〵にたてる

みねてうくひすのなくをきゝ

うんうんうぐひすの鳴のこゑ

正数 春ごとに君のそをるゝめ

うんうんうんうんうんうんうんうん

ヨひつゞ 中 給へ恵かめぐみうれてあり

かゝるめやうれのあれてうく

やうくうんうんうん

風恋一 ヨさゝ 源さへる紀世まりさいわう

ヨ 実忠 一奥給源さい

ヨとゞ 仁 ヨ 里 ヨ 正 晴 ヨ 殿 ヨ 仁 ヨ

ちやうとうとうとうとうとうれとう

ふるまう

ふのともこうをよ

らよひうまんれはひるまうとうとう

ちよひうまんとうれらとう

ふうくうくうくうくうくうくう

風恋二 中納言雅明

名をもうまうまうまう年中絶ふ夜う

初雪の雪みとまうとうとうとうとう

くくのしの絶ふ絶て

ふうまうまうまうまうまうまう

或云今モワラハヘノ言ノ
ハニ寝ハ旅ノトナヘ哥
ハトナクトイヘリ

ゐなかぶとさらし給つ。まことに其のいふ人給へるかの
あなたに心もとなくのつひにわかれは此世にいかで海
でもあるよ。ありしこそまつよ地ともしろき。うちわかれ
るもの杖の段ありし地りてありていましてなるかなるよ
くちをしく
松の山よりて夜つかうまつれ花のくまうくかう
ときこえさせたまへにみそくせんとて地まうけ給へ
また御こころみさせ給ふ。これ花給りて色紙
給ひつまいて書きつつ海をそへてまうりぬおそて文
に添へしそて、人くの中にとまうすと地なれ人
おまへはふくみつけて給

やりしをいつくれのおとと君の花うつくしぬ山て
おしこそこきそうしてけれ君みなくしりつ人も給
まう。右近かねるかとりわもそうしろいそこえ
んとさひしうしにおくなく地は君みれ人ものう
らうしもみなりもてのひくあつかたこのうきゆく
ゆきあるしよりひかくゆかりはしあそこやまはな
みりてあるらむ。かのくうちのみてよりおほしして
地にあわれしふてきてあるまてる紀えあり
あうりきれにて。地うしなやかなきかれかりつくつしうら
よろうきけくより
地ちひれそくあらうれり地すうへはえこくろと

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

御返シナシ 一本已下サカ
四ノ巻ニツキテカクテ
中宮ヨリオチャオトヘリ

とこゑはをあはせたまふ。とて、いつゝあそはしてみよとおほせられちゝ
のおとゝみなくさまうけ給へとて、くそてなくゝ。おそ
ふみ給ふ。かうしもいつけみなうちしきものゝられそ。
ひさしもとひてきこく給ふ。ゆゝ給ふの君
人ならぬ滝の川とあるうたをつくしたまへれ
おほかたことくへんまへのうへつ給ふ。ひゞきましよく
きこゆ。さら
むつされはるかにさくらく給ぬものゝうへにしきにと
身をもなりぬへきされ。給ひてなすおほるまさろ
らよ物しおほさ所おかしけるなとのはくらうをて花さら
またみもしはへるまでもの給へらやつまた給所

ほんそれのうへりなれえこのうへりにあるにこゝ
かくしつをうちたまやそへかなう給ほや
しくよの中をうれゆ給ふなかへあるに
なれこれかなる川もくそこすいふうとをいつ
給りぬ花かなり給てさむ、あいこと
うれか事をいらうつたも給ほの所を
とめいしくかあるといふかふそのかきに
なれうくらゝすとのらしやとさせそそまつ
給かやとの給よ仏の御をる花のたつぬれる
人くなりてこんせつへてうゝちく給。こゝなるおもへて
二なよおもうそえとか給へて

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

そよくしくめいそよ
ふ方をふわしくばいうようくんま
ゆくくにいくくさもゆくく
りへやくゆそうふすくいてそ
らやさそる此ゆそ、ふ方あゆ
ゆくんゆもさゆうくもゆうそ
さゆくてもそいそうくうよ
ふそうゆくんゆくそれそ
いはまいくはくくやさそ、そ
くの名
そくゆそゆくのそゆうくう

くふそもよてさそる、さそ
らぬ物なり、さいうりのみくく
ハはうそもんいくる色られ
そそうさうそれむくはるく
つく海そうろうそこれいて
しゆんくとハは里くんさ
はゆもさふくくりくひとこ
のうりみうれるそれを清代
れそむうくいみくうるく
うしゆそれさそやそれも
みゆはくゆ称うくうなせ

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

し月のかげとあれハしたかうし給くあやうし絲
つまのうちさひしくねふらんとて寺る女はさう
そくひとくらしかは内侍給ハそこさまりめしくて
よくめ給くおはしあしてはしめてゐ給ふよみ
しやうたりなかのかうそく内侍給』

ふちのうちなるとねの枝なつかしくてとかく所よりこゝまで六枚田露の枝各
のまゝ入あり

△目
ヨ本梅の花さの巻こゝみ在る

ヨコ

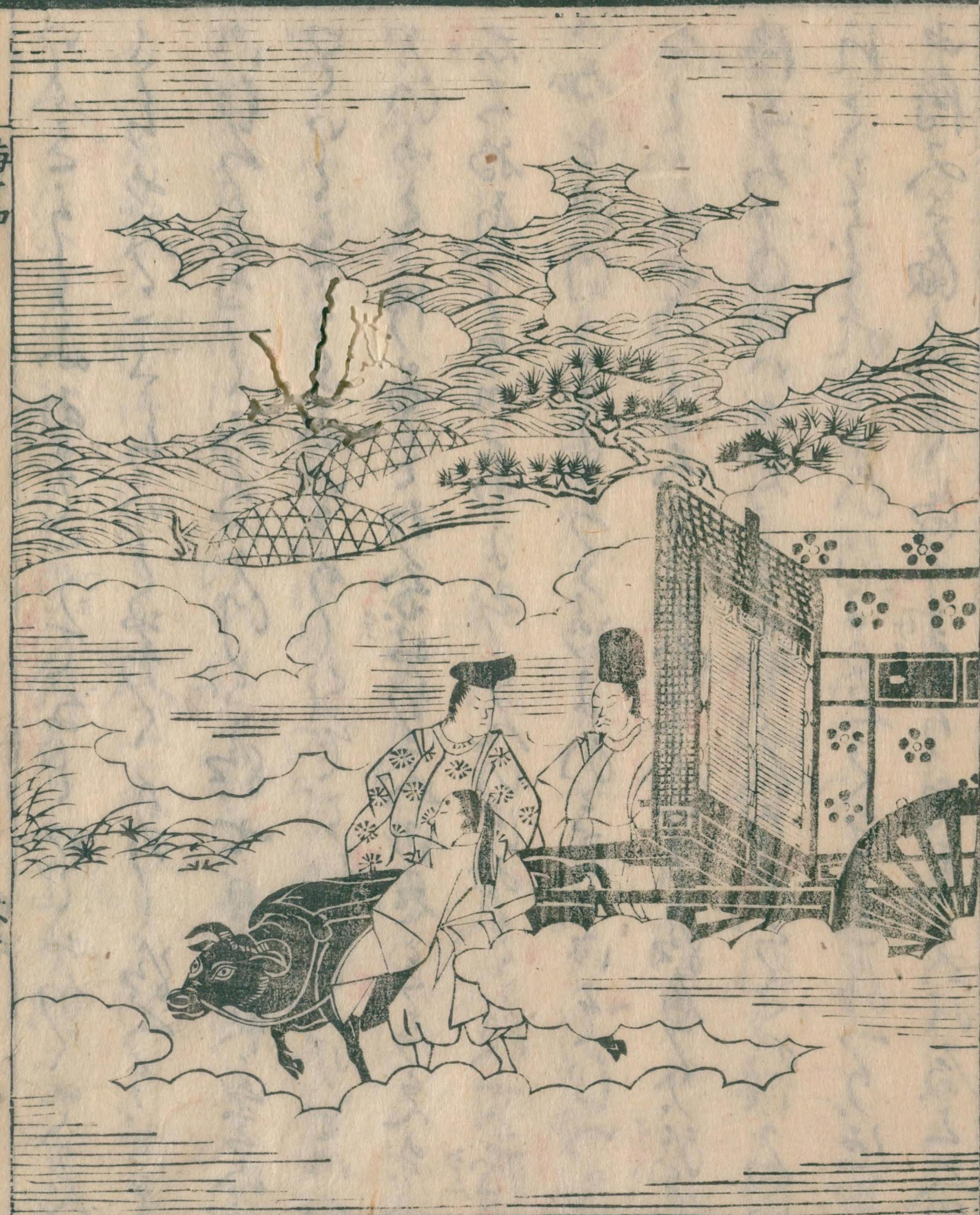
ハタコ

貞本
庚午七月十九日以古写本令挍合畢
庚午十二月十三日以蔵六呂挍本令一挍畢 加墨居者之
辛未五月十七日以羽倉本令挍合畢 加藍居者之

文久三年十二月晋以細井貞雄手挍本対挍了

横山由清

已下あて宮の巻
攙入（こゝみ不用）



国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

さうざうしかりしをおやどもよろこびてみつきて或本
大納言女はよろこび一夜もはなるることなし二つ
なりぬれはくらすをそおもえしのひ給けるに大殿
こまくふしあまりあはれとおもうさおやはおさなき一つ
うねおもうさおやのとくになりて良少のへをと
ちうしてはんへくのうそよろこれまうりかくもいと
おかしんへくものかふる文女御のきこしおはしてと
のまうりうち語らひて或も大納言にいとおもう弁
殿の御方にまうでけるに語らひまうて夜更けの世はうち
のさまえうまでいひ殿はおはしまはれはきもてむこそ
のうちさゆまことにらく経しのよまうて若君のの

わりなくて御経よみまうさ給ふ人々御ともの
やうやうまうり給ひれの思ひいとなめかしおなし殿上
人うきつきのかつらにてさうか給はれいとも殿上
れそてうむしろめれはまゐりけりこてれせうい
信よ八王帝に信みとりけりけるこれそはれ
れつひよ此よの人々はあれへくしあれ給ひと
おもしくのうけを給ひてしてりてまゐて月日へて文おり
せうよ思ひまし給ひておほちよ語りて給ふおは
くう年の二三月よりまうでめ給てはしこみこ
むまたまひたらむやしあるひとりのおまへしこと
あり御て侍りて若君たちまうりまうりありけくて

830
107

天明元丑九月廿一日圖南翁ノ本ヲ以當巻十九丁ルヽテヲ校合同廿二日了　田中道光

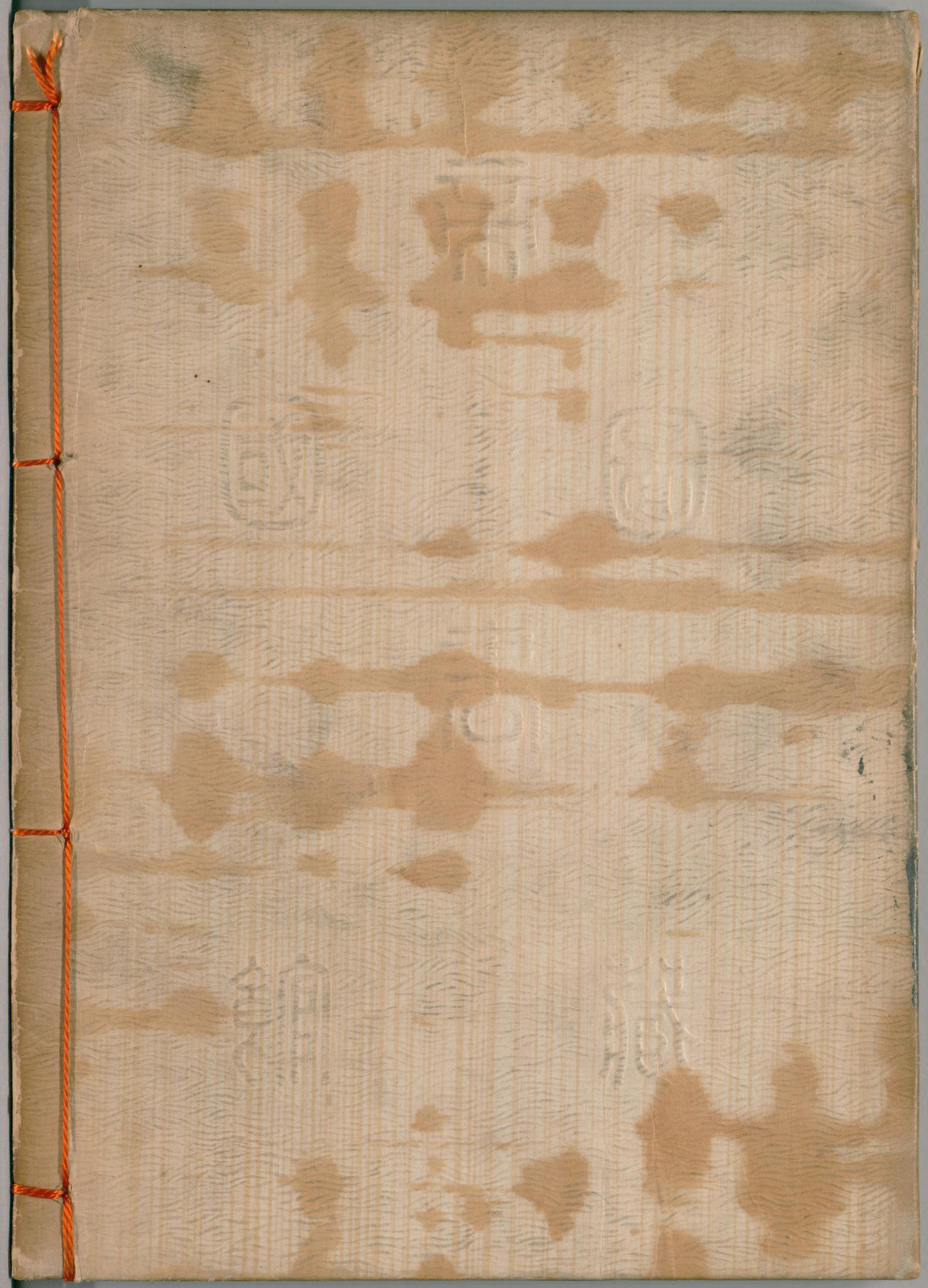
當巻十九丁ルヨリ以下他巻ニミタレ入ルヲ又當南翁ノ本ト考合テ同十一月上旬校合ス

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

830
30
107

国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』　請求記号 830-107

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』　請求記号 830-107

ガラス使用